（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　　農　学　　）	氏名	李　丹
論文題目	現代中国における帰郷農民工の生活展開と起業活動に関する研究 ―家族の再編を視点とした江蘇省・河北省農村部の調査から―		

（論文内容の要旨）

本論文は中国において郷里の村落・郷鎮及びその付近に出稼ぎから回帰した農民工を対象として、出稼ぎ前から帰郷後の生活実態と帰郷後の起業活動に着目し、それらを起因とする家族、ジェンダー、村落関係の変容について分析するものである。

序章では研究背景、先行研究の検討、本研究の分析枠組みと分析手法、課題および調査地の選定などの解説を通して、本研究の着眼点と独自性、分析方法が展開される。改革開放以降の中国経済発展を支えてきた出稼ぎ農民工について、既往研究では出郷や都市定住のような都市に向かう農民の移動に主眼を置いてきた。しかし実態として、経済変動や、戸籍制度などの政策的制約、家庭的・個人的要因によって、出稼ぎ農民工は農村と都市の間を往還し、その多くはやがて出身の省や市、農村部に帰っていく。とくに、リーマンショック以降、出稼ぎ農民工の回帰移動の傾向が強まりつつある。そこで本研究では、出稼ぎから帰郷した農民工を対象として、経済的動機だけでなく、家族、ジェンダー、村落の意義との結びつきも視野に含めつつ、その生活展開と起業活動を分析する。社会的動機に注目するのは、出稼ぎ農民工の帰郷において、その根底で「ジャ（家）」や「郷土」に関する価値観が無視できない要因の一つとなっているからである。具体的には、第１に帰郷農民工の人生経歴とりわけ出稼ぎ、帰郷、起業に代表されるライフイベントを把握し、世代ごとのライフコースのパターンおよび各世代における出稼ぎ、帰郷、起業の持つ意味を明らかにすること、および第２に帰郷農民工の出稼ぎ、帰郷、起業における家族、ジェンダー、村落関係との相互影響を考察するという課題が設定される。

第１章では、江蘇省中部にあるＦ村の農家について、その世帯構成を把握したうえで出稼ぎの有無によって分類し、相互の比較から出稼ぎが農村家族、村落社会に与えるインパクトを明らかにした。その結果、核家族中心であった１９９０年代から、出稼ぎによって直系家族や高齢者のみ家族、「隔代（祖父母と孫）」家族の増大という変化がみられた。農家間の経済格差が広がりつつある一方で、同族の結束性の高まりや村落レベル事業の増加なども観察された。

第２章では、Ｆ村の４３名の帰郷農民工を対象に、出生年代によって旧世代、中間世代、新世代に分類し、それぞれについて出稼ぎから帰郷、その後の就業・起業という人生の軌跡を概観し、家族と村落に対する意識の世代的差異と変容を捉えた。旧世代は主に息子中心の家族規範に基づいて出稼ぎが展開する。したがって、帰郷理由も起業というより家族の世話と子供の就学であった。中間世代では次第に家族と自己実現のバランスが求められるようになる。帰郷は子供のためであるが、帰郷後に起業する例が圧倒的に多くなった。他方、新世代は親世代に当たる旧世代の生き方を批判的に捉えているようにみえる。彼／女らは、農村に帰るよりも近くの小中都市に定住する志向性の高いことが明らかとなった。

第３章では、Ｆ村における３１名の農業・水産養殖業経営者を対象に、出稼ぎ経験と起業プロセス、およびそれらの関連性を明らかにした。Ｆ村では１９８０年代生ま

れの中間世代帰郷農民工を中心とする農業・水産養殖業経営が特徴的である。彼らの起業においては、出稼ぎ先で得られた社会的ネットワークを駆使しつつ、家族や親族から手厚く資金的、労働的、技術的支援を受けていることが明らかとなった。彼らの起業が家族の結束だけでなく、親族・村落との結束を高めたことも指摘した。

第４章では、河北省南部にあるM鎮において、５３名の農村女性を対象に、主な就業経歴と労働移動の経験についてインタビュー調査を実施し、世代ごとのライフコースの変容を明らかにした。当該地域において、農村女性の就業は農業中心から、地元での非農業就業や都市への出稼ぎ、地元での非農業起業などへと多様化している。特に出稼ぎ、起業は女性の経済的自立意識の高まりと強いつながりを持つことが示された。

第５章では、同じくM鎮において、２４名の女性帰郷農民工を対象に、出稼ぎ経験および帰郷後の生活と就業についての聞き取りデータをもとに、各世代における出稼ぎの意義と帰郷後の起業との関連を明らかにした。女性の経済的自立意識が後の世代ほど高まっていること、および若い世代の帰郷女性が求めている人生像として、結婚、育児だけでなく、自己実現の要求も高まっていることがライフコース分析から示された。

以上の分析を踏まえて終章では、帰郷農民工における出稼ぎからの帰郷要因や動機、帰郷後の生活展開、起業のプロセスなどについて整理し、それらと家族規範やジェンダー、村落関係との相互影響について明らかにした。

注)論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は１頁を３８字×３６行で作成し、合わせて、３，０００字を標準とすること。
論文内容の要旨を英語で記入する場合は、４００～１，１００wordsで作成し
審査結果の要旨は日本語５００～２，０００字程度で作成すること。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

改革開放以降の中国は急速な経済発展を経験し、圧縮された近代とも称されるように、経済水準のみならず地域生活や家族規範など、私的領域を含む広汎な社会変動の渦中にある。農村部から都市部への出稼ぎは、そうした急激な経済発展を支えてきた主要要素であり、その動向は出向先の都市部および出郷地としての農村部に大きな影響を与えている。

本研究は、中国における農村部からの出稼ぎを都市部における受入れ問題として課題とするのではなく、近年になって拡大しつつある出稼ぎ農民工の帰郷とその後の起業に焦点をあてて、出稼ぎのもつ多元的な社会的影響を明らかにしている。対象地域を設定することにより、出稼ぎ経験者と非経験者の双方を対象にして詳細かつ広汎なインタビュー調査を実施し、出稼ぎと帰郷、起業のプロセスを非経験者との比較も含めて明らかにしており、現代中国農村における出稼ぎを核とした農家家族の生存戦略が生き生きと伝わる研究となっている。本論文で評価できる点は以下の通りである。

１．帰郷農民工の起業という中国農村にみられる近年の動向にいち早く対応し、政策論的な上からの手法ではなく、綿密な現地調査に基づく下からの手法とライフコース概念の適用によって、そのプロセスを説得的に示した。
２．とりわけ女性帰郷農民工に焦点をあてて、農村女性が圧縮された近代というプロセスにおいて、世代ごとにどのような意味で出稼ぎを経験し、世代ごとにどのように家族関係と折り合いをつけてきたのかについて、豊富なインタビュー結果をもとに、家族規範と女性の自立志向の高まりとの緊張関係を明らかにした。
３．出稼ぎと帰郷という現象を通じて、現代中国農村における人々の主体的対応を明らかにした。中国農村の変容は、末端にまで広がる強力な政治的イニシアティブによって、政策の客体として描かれる場合が極めて多い。本研究は、一見客体とみえる農村変容の背後に、人々の家族や親族、村落に対する規範の働きがあることを明らかにし、今後の中国の農村政策を構想するときの重要な論点を提起した。

以上のように、本研究は、中国における帰郷農民工が経済的要因と家族を始めとする社会規範に条件付けられながら、出稼ぎ、帰郷、起業を通じて自らの暮らしを主体的に構成していくプロセスを女性の場合も含めた綿密な質的調査結果をもとに明らかにしており、農業・農村社会学、ジェンダー研究、中国農村論、中国農業政策論の発展に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、令和元年６月１３日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、博士（農学）の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。

また、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公

表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

注）論文内容の要旨、審査の結果の要旨及び学位論文は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。

ただし、特許申請、雑誌掲載等の関係により、要旨を学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降（学位授与日から３ヶ月以内）